

[原著論文]

ローマ字指導を援用した小学校英語の文字指導の試案

松本由美・大友美奈

要 約

小学校3年生国語科で日本語の音韻構造のため指導される訓令式ローマ字は、アルファベット文字の導入として外国語（英語）活動にも資するが、一方で英語の表音と一致しないローマ字の表音や、子音時に必ず母音時を付加することが、英語らしい発音を阻害することもある。そこで、ローマ字指導の利点を生かしつつ、発音の弊害を解消する指導案を提案して英語活動の一助としたい。

キーワード：小学校英語，新学習指導要領，書くこと，文字指導，ローマ字指導

1. はじめに

2年間の移行期間を経て2020（令和2）年度より、新しい小学校学習指導要領（2017年度告示）が全面実施され、小学校3、4年生における外国語（英語）活動（以降 英語活動と記す）および小学校5、6年生における科目である外国語（英語）が必修となる。これにより日本の公教育において、小学校第3学年から高等学校第3学年まで、10年間にわたる系統的な英語学習が行われることになる。特に小学校における英語教育は開始学年の引き下げという低年齢化と特別活動から正式な教科になる教科化という二つの大きな変革を遂げなければならず、移行期間を経てなお、慎重な対応が求められる。中でも、5、6年生における書くことの導入は、2008（平成20）年に英語活動が初めて必修化された当初から、小学校段階の英語教育は聞くこと、話すことといった音声中心に行い、書くこと、文字指導は積極的に行うべきではないとされていた原則からの大きな転換であり、十二分に準備して臨まなければならない。

一方、英語と同じ文字体系（ローマンアルファベット）を使用する訓令式ローマ字が、日本語の音韻構造を理解させるために、小学校3年次国語科において指導されるので、ローマンアルファベットの文字の書字導入はここでなされる。しかし、松本・大友（2018）で述べた通り、言語活動における書くことは、書字のみならず、認識した音声情報と、その音声を持つ文字の

形（視覚情報）を脳内でマッチングして、その文字の形を運筆により再現するという過程を経なければならない。従って、国語科での訓令式ローマ字の導入は、文字の形を運筆によって再現する書字には利点があると同時に、日本語の音声情報とアルファベットの文字をマッチングするため、英語の音声情報とアルファベットの文字のマッチングを阻害する可能性があることは否定できない。例えば訓令式ローマ字では、日本語の文字‘つ’の音声と‘tu’をマッチングするため、英語の音声情報/tju/を得た時に、それにマッチする‘tu’という視覚情報を得られなかったりする。また、訓令式ローマ字は日本語の音韻構造の特徴の一つである子音は必ず母音を伴うことを理解させているため、英語の子音のみの発音にも母音を挿入し、英語らしい発音を阻害することにもなりかねない。同じ文字を使いつつも、日本語と英語の異なる音韻体系を分けて理解することは、指導者の支援無くしては、困難を極めるであろう。

しかし、指導者が国語科におけるローマ字指導が、小学校英語活動や英語科に及ぼすであろう正負の影響を自覚し指導していない限り、ローマ字指導が及ぼす影響は中学校以降負の影響として表面化することになりかねない。またAssistant Language Teacher（外国語指導助手以下ALTと記す）などの教員以外の指導者が実質的に英語活動を担っているようなケースでは、発見が遅れるであろう。小学校3、4年生で年間35時間行う英語活動、5、6年生で70時間行う英語科では、今まで以上に担任が中心となって、児童に指導することが想定されることから、担任がローマ字指導の英語学習への影響をよく理解し、効果的な文字指導の方法について、研究し実践することが必要となるであろう。本研究をその一助としたい。

本稿の構成は以下のとおりである：第2章では、日本の小学校英語教育が英語の文字指導をどのように取り扱ってきたのか、その変遷を資料や教材からみていく。第3章では、国語科におけるローマ字指導の実態を述べる。第4章では、ローマ字指導と英語の文字指導の関わりについて述べた先行研究を通覧し研究の動向を把握する。第5章では、本稿筆者が行う、ローマ字指導を援用する小学校英語の文字指導の試案を提案する。第6章で全体をまとめ、第7章で展望を述べる。

2. 文字指導をめぐる変遷

2.1 『小学校英語活動実践の手引き』（2001）

2001（平成13）年に刊行された『小学校英語活動実践の手引き』では、小学校英語を進める際の留意点として、逐一日本語に訳さず、最初から分からなくても、大体何を言っているか推測させること、英語の発音をカタカナに置き換えないこと、原則として小学校の英語活動では音声を中心に行うことなど、現在も小学校の英語科、英語活動の指導の基本となっている方針が以下のように記されている：「小学校での英語において日本語とは音声文字、文法、語順などが異なる英語を全て同時に導入することは子どもの学習にとって大きな負担になり、英語

嫌いを生み出す大きな要因となる。したがって、小学校段階では音声と文字とを切り離して音声を中心にした指導を心がけることが大切である。」という、音声を中心とした聞くこと話すことという活動が主体で「英文を読むことはない」と述べられている。

2.2 『英語ノート』(2008)

2008(平成20)年には、2011(平成23)年度からの英語活動必修化を前に、学習指導要領に示された英語活動の目標及び内容を具現する共通教材として、文部科学省が『英語ノート1, 2』を作成し全国の拠点校に配布した。これは、実際に活用する教材であると同時に、英語活動において扱う語彙や文型、また展開すべき活動を、国が初めて示すモデルとなるものであった。それゆえ、教科書ではないため使用義務がないにも拘らず、多くの小学校では何らかの形で使用されていた。そして、この『英語ノート』でも音声を中心とした指導に重点が置かれており、基本的に「文字は提示しない」というのが、多くの小学校現場での共通認識であった。

2.3 『Hi, friends!』と『Hi, friends! Plus』

『英語ノート』は、政権交代の余波を受けて、事業仕分けの折に廃止となったが、その後、2011(平成23)年度に再び自民党政権に戻ると、『Hi, friends!』に形を変えて出版された。ここで文字の取り扱いの方針は一転し、「文字は提示しない」という英語ノートから、『Hi, friends! 1』(5年生)ではLesson 5において大文字の認識、『Hi, friends 2』(6年生)ではLesson 1で小文字の認識が取り上げられている。

さらに2016(平成28)年には英語教育強化地域拠点事業の一環として『Hi, friends! Plus』が作られた。これは、『Hi, friends!』を補助するものだが、文字そのものの認識に重点をおいて作成されたデジタル教材であり、大文字、小文字の字形、文字の名前読みの認識、書字練習のためのワークシートなどが含まれている。文部科学省がホームページで説明するように、文字を書くことの前段階で音声による活動が十分に行われていること前提とするが、児童が文字に慣れ親しむこと、さらに文字を読んだり書いたりすることに踏み込んだ補助教材が出されたことは、大きな転換であると言える。

2.4 「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」文部科学省教育課程部会

文字を媒介とした「読むこと」「書くこと」を取り入れる動きは、学習指導要領改訂に向けてさらに加速された。小学校外国語の教科化を視野に入れた外国語教育の改善策を検討する文部科学省の教育課程部会における外国語ワーキンググループは、2016(平成28)年8月26日『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』において、音声中心に進められてきたこ

れまでの小学校英語に対して、今後は発達段階に応じて「読むこと」、「書くこと」を取り入れる必要であると述べられている：

①アルファベットの文字や単語などの認識，②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き，③語順の違いなど文構造への気付きなど，言語能力向上の観点から，実際のコミュニケーションの場を通して，言葉の仕組みの理解などを促す指導を行うために必要な時間数を確保することが必要である。（文部科学省教育課程部会「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」2016年）

2.5 新学習指導要領全面实施 教科書の導入

これまでの流れを踏まえ、いよいよ2020（令和2）年度には新しい学習指導要領が全面实施され、小学校5、6年生では年間70時間の課目としての英語科が、小学校3、4年生では35時間の英語活動が必修となる。2018（平成29）年、2019（平成30、令和元）年の2年間の移行期間を経て、小学校5、6年生では読むこと、書くことも本格的に導入される。

教科書については、小学校3、4年生は引き続き新学習指導要領に対応した補助教材である『Let's Try!』を使用できるが、5、6年生においては2020（令和2）年度より、各教科書会社で作成し検定を経た教科書を使用することとなる。各社特色があり、内容も様々であるが、どの教科書にも共通して言えるのは、『英語ノート』、『Hi, friends!』、『We Can!』に比較すると誌面の文字数が増えているということである。

文字学習の段取りは、現行学習指導要領における小学校5、6年生の外国語活動と同様に、新しい学習指導要領でも、外国語活動で行われ、最初に外国語活動1年目にあたる3年生の『Let's Try1』Unit6で大文字を学習し、次に4年生の『Let's Try 2』Unit 6で小文字を学習することになる。この順は、文字形状の認知しやすさとの関連であろう。

外国語活動が小学校3年生から開始されても、音声先行の指導であるという基本には変更がないが、『Let's Try』で前述のようにアルファベットの文字を学習するとなれば、これまで問題にならなかった、ローマ字学習との関連性を考慮する必要があるが出てくる。同じ文字を使用しながら英語の表記に使う外国語活動と、日本語の表記として用いる、国語科のローマ字と混乱することなく、寧ろ同じ時期に学習することを利点として生かし、教科横断学習の視点からも効果的な指導方法を模索していくことが有用である。

3. ローマ字学習の現状・目的

3.1 目的

3.1.1 日本語学習

国語科でのローマ字の指導は日本語の音韻構造の理解を深めるためのものであり、ローマ字表記は1953（昭和28）年の内閣告示に基づき訓令式で行うべきものとされてきていた。

その後の小学校学習指導要領では外国の音声や文字について日本語と外国語との違いに気づく（文部科学省，2018）とあるので、英語科、英語活動が必須となる新学習指導要領においては、国語科で完結するのではなく、日本語と英語の音や表記をより深く理解するために活用できると考えられる。

3.1.2 小学校学習指導要領解説国語編

指導要領には、1地名人名などの固有名詞を含めた日常使われている簡単な単語をローマ字で読み書きできるようにする、2コンピューターを使うときにローマ字打ちができるようにする。とある。キーボードを用いて入力する際にローマ字入力を活用することができるような基本的な知識を身につけることが目的となっている。

3.2 取り扱う学年

2011年から施行された学習指導要領（文部科学省，2011）により、従来 小学校4年生で学習していたローマ字が小学校3年生からの取り扱いとなった。その理由としては、日常でローマ字を目にする機会が増えていることや、総合的な学習の時間の調べ学習でPCを使用することなどが挙げられている。

3.3 訓令式・ヘボン式

学習指導要領解説国語編（文部科学省，2018）では「一般に国語を書き表す際には第1表に掲げたつづり方によるものと」し、「従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によっても差し支えない」とされている。第1表（いわゆる訓令式）による表記の指導に当たっては、日本語の音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解することが重要である。第2表（いわゆるヘボン式と日本式）による表記の指導に当たっては、例えば、パスポートに記載される氏名の表記など、外国の人たちとコミュニケーションをとる際に用いられることが多い表記の仕方を理解することが重要である。訓令式を指導の基本としながらも、「ヘボン式の表記の指導も差し支えない」という姿勢である。

3.4 時数・指導の実際

東京書籍の平成27年度用国語教科書の指導計画配当時数表ではローマ字学習には小学校3年生は9月に3時間、小学校4年生は6月に3時間が当てられている。外国語学習との連携を考慮しない場合、この配当時間のみで文字の名前、字形、さらに日本語の音との関連性を理解した上で読んだり書いたりすることは難しい。

令和2年度版になり、小学校3年生6月に3時間、11月に2時間、小学校4年生7月2時間と合計時数は1時間増え、2学年に渡っての指導となった。これは2020（令和2）年度から小学校3年生、4年生の年間35時間の英語活動必須化も念頭においてのことと考えられる。一つの題材を教科・領域をまたがってそれぞれのねらいを持って指導する場合、学習者の負荷が大きくなりすぎず、相乗効果を生み出すことのできる手立ての工夫が必要となる。

4. 先行研究

川上（2014）は英語活動の導入によって二極化が生まれているとしている。中学校1年生の始めに文字を覚えさせ、単語が書けるようになり、文を書くルールを指導するという中学校英語の第一関門は、外国語活動を小学校で体験した生徒にとって必ずしも適切な負荷となっていない現状がある。中学校で教師の作成したプリントの英文にカタカナが振ってあるというケースが報告されているが、これは適切なステップを踏んで音声言語から文字言語へと進めていない歪みの現れと言えよう。文字の導入の第一ステップである国語科のローマ字学習を大事にし、小学校の英語活動・英語科、中学校の英語へとスムーズに接続させることにより児童の主体的な学習へとつなげる手立てが必要である。

本田他（2007）は（1）ローマ字学習後の英語活動で児童に「英語の文字に触れさせること」の意義（2）訓令式・ヘボン式についてのあり方（3）ローマ字は英語でないことを児童に認識させる重要性（4）ローマ字学習を英語活動に応用できる指導法や環境の整備、の4点について指摘をしている。更に、これらの点は英語教育や英語活動の中で解決できる問題ではない、と続ける。1つの言語教育からのアプローチだけでは不可能であり、国語教育における「ローマ字指導」と英語活動の連携が必要不可欠である、とも述べている。

また、山上・池本（2017）は3年生の国語科のローマ字のみならず、2年生の算数mm（ミリメートル）、g（グラム）で英語の文字に触れる場面もある点にも言及している。そして、大切な入門期の文字指導が配慮なく行われている実態は早急に改善する必要があるとしている。

5. 課題

以上の先行研究も踏まえて、課題を以下に整理する。

5.1 訓令式先行

英語活動・英語科が必須となり、教科書や副教材の表記の中心は訓令式のみであったものがカッコ書きでヘボン式を提示するようになったり、英語活動を念頭におきヘボン式を中心にした副教材も製作されていたりする。英語の音とのつながりを考えたときには訓令式よりもヘボン式の方がよりスムーズだと考えられるので、英語指導の見地からこれは好ましい変化であると捉えられる。しかしローマ字に限ったことではないが現場での対応は自治体により、学校により、また学級担任により様々である。

5.1.1 歴史的背景とその影響

国語の授業では長く訓令式が指導されてきており、実際に多くの小学校では現在でも訓令式を中心に指導している。昭和25年3月文部省（当時）の「ローマ字教育審議会」により出された「改訂 ローマ字教育の指針」の中で次のように述べられている。

「ローマ字は表音文字であるから、文字に拘らずに直接に言葉の意味を理解させることができ、したがって、表意文字である漢字の場合よりも、書きことばに対する反省を強め、やさしく、わかりやすいことばを書いたり、話したりさせることに役立つ。また、ローマ字は単音文字であるから、国語の音韻的ならびに文法構造に関する自覚を高め、美しく、正しい国語を自由に使う能力を養うことができる。」

国語の音韻的構造を学習することが容易であるとされ、限られた時数の中比較的指導しやすいということの理由の一つに、教員の中では訓令式での指導が当たり前という認識が広く定着していることがある。

その一例は英語活動で使用されるネームプレート、ネームカードに見られる。英語活動の時間に、紐をつけて首から下げるものであったり、安全ピンで止めるものであったり、形式は様々だが何らかの形でローマ字表記の名前を身につけることがよくある。筆者がこの5年間JTEとして指導に関わってきた60余の小学校3年生、4年生の学級の殆どにおいては、事前に要請しなければ児童の名前表記はほぼ訓令式で作成されていた。児童名簿ではカタカナで表記している日本語以外にルーツのある児童の氏名を英語の時間のネームプレートに、そのカタカナのローマ字表記としていた事例もある。（例：Michaelを“Maikeru”など）英語の時間はパスポートなどで一般に使用される表記で統一する方が中学校での学習にもつながってゆくのではという提案を学級担任に伝えても、児童が混乱するという理由で訓令式のままとされた学級もあった。

5.1.2 キーボード入力に際しての有用性

ローマ字学習の導入が小学校4年生から3年生へと移動した背景には、主体的な学びに重きが置かれる中でコンピューターを使用した調べ学習等の時間も増えた。tu→tsu, ti→chiは、

入力に慣れていない児童にとって負担であると考える指導者がいるのも理解できる。

しかし、ヘボン式の有用性を示す以下のような調査もある。長澤（2012）が短大の学生に対して行った調査では、入学の時点で「hu」と入力していた学生が32名（69.6%）だったが、前期授業で「fu」の利便性に触れた結果9名（19.5%）が打ち方を変更した。

小学生の発達段階、指導にかけられる時間などの要素も鑑みる必要があるため短大生の調査結果がそのまま当てはまるわけではないが、小学生への指導の際にも長期的な視点は必要であることは確かであると言える。

5.2 児童にとってのローマ字と英語

ワークシートを配布時に、「名前はローマ字で書くの？」と質問した児童に対し、「ローマ字じゃなくて英語でしょ」と他の児童が返答したという事例があった。その児童は民間の英語教室で英語を学習しており、訓令式＝ローマ字、ヘボン式＝英語、という認識であった。近年教材も様々なものが出版されてきているが、“kitte”（切手）や“aisatu”（挨拶）のような表記の読み書きをドリルで練習させるよりも、人名・身近な地名など児童が親しみやすい語や“pen”（ペン）“banana”（バナナ）など英語の表記と同じ語を中心に提示の方が理解の助けとなることが想定される。山本・池本（2017）は、従来のペンマンシップでは実際の場面でローマ字表記されることのない語彙（例：本 hon, 鉛筆 enpitu）などに替えて実際に表記されるもの（例：東京 Tokyo）や、英語の綴りと重なっているもの（例：ペン pen）のみを使用した教材を作成している。

小学校3年生からの英語活動必修化を受け、ローマ字や英語の学習が学校のみという児童も混乱しないような指導の手順、提示方法について今後更なる工夫が求められる。

5.3 表記方法以外の課題

ヘボン式か、訓令式かという議論の他にも大きな課題がいくつかある。指導の試案により具体性を持たせ、効果的なものとするために課題を整理する。

5.3.1 文字の名前の発音

国語科のローマ字学習においては英語の発音ではなく、カタカナで全て表すことのできる日本式のアルファベット読みとして文字の名前を学習している。（例 エー、ビー、シー、…エックス、ワイ、ゼット）そのため、英語活動でアルファベットを学ぶ際には、児童は/ei/と「エー」、/zi:/または/zéd/と「ゼット」が同じ文字の音であるということを新たな知識として取り入れる必要がある。また、「エフ」「エル」など常に語尾に母音を挿入した発音で文字を認識することによる弊害も大きい。

5.3.2 書字

名前の認識とともに児童にとって難しいのは、b, d, p, qのような似た字形の文字が複数あることである。またn, h, rやc, o, u, aなどの書き分けに困難を覚える児童もいる。ローマ字学習においては小文字を中心に読んだり書いたりするため、弁別特長の少ないアルファベット小文字の指導は国語科の限られた時数の指導での完結ではなく、ローマ字習得の観点からも英語活動、英語科と連携する方がより定着を測りやすいと考えられる。

5.3.3 文字の音

ローマ字の指導においてa, i, u, e, oを「あいうえお」の音にそれぞれ当てはめることから、英語の発音の際に影響が出る児童もいる。特にuを「う」とリンクさせて記憶しているとローマ字の読み方を頼りにcupクプ, capをカプと読むということも起こってくる。pの後に母音が挿入されていないことを指摘すると語尾を/pu/ではなく語尾を/p/と言い換えることができる児童も多く見られるが、初めに「う」「あ」の音と結び付けて記憶した児童にとって語中のu, aの英語音の認識は容易ではない。

6. 指導方法についての提案

これらの課題を踏まえ、実際の小学校3年生、4年生で児童の理解をより深めるための指導法について提案をする。

6.1 指導のねらい

国語科としての指導のねらいも踏まえながら、更に英語科へつなげるために、ローマ字学習にこれから取り組む児童への指導、既にローマ字を通常の手順で学習している児童への指導についてそれぞれ考察をする。

6.1.1 ローマ字指導の段階において（国語の時間を中心に）

(1) ローマ字は、「英語等で使用されているアルファベットの文字を用いて日本語を表記したものである」という前提に基づき、国語の時間であっても指導者は英語の発音で文字の名前を発音する。(2)指導はヘボン式を基本とし、その中で日本語の音韻体系への気づきを促す(3)特に母音指導の際、英語としてのアルファベットの文字は必ずしも一字一音ではなく、何通りかの発音があるということも併せて指導する。(4)書字に関しては、限られた国語科の時間のみでの定着は難しいことから、英語活動やその他の教科とも関連させながら長期的な視点での定着を目指す。

6.1.2 アルファベット文字の発音

2020(令和2)年度から使用される東京書籍「新しい国語三」でのローマ字指導の配当時間は、小学校3年生の6月に3時間、11月に2時間となっている。3年生6月で初めてローマ字の学習をするまでに、少なくとも6時間から8時間程度の英語活動の時間がある事が想定される。文科省作成教材の3年生用Let's Try!1ではユニット6でアルファベットの大文字を扱うが、ローマ字学習以前に英語活動の中で何らかの形でアルファベットの名前の英語発音を児童に提示しておいた上で、国語科でもその流れを引き継ぐというのが児童にとってスムーズな流れであると考えられる。エー、ブイ、ゼットではなく、/ei/, /vi:/, /zi:/または/zéd/と発音し、「英語の文字を使って日本語を表す」という意識を児童にも持たせる。

学習指導要領解説国語編(文部科学省, 2018)にローマ字学習の際の留意点として「日本語の音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解することが重要」と記されている。小学校3年生で分析的な理解や英語との比較は難しいが、日本語と異なる音韻体系の言語で主に使用されている文字を使用して日本語を表記する方法であるという認識は、多くの児童にとって理解の一助となるのではないかと想定される。

6.1.3 ヘボン式

本田, 小川, 前田(2007)はローマ字が日本語固有の音韻構造を表記するものであるという前提に基づき、「パスポートなど身分を証明する重要な書類などに用いられているローマ字表記はヘボン式の“chi”であり、ローマ字表記のあり方, 指導方法については今後柔軟な対応の検討が望まれる」と述べている。

また, 山本, 池本(2017)は3年生で訓令式を学んだ2～3年後に高学年の外国語活動で自分の名前をヘボン式で書かされるという現状が児童にとって負担が大きいという点を指摘している。訓令式からヘボン式への内容的な隔たりに加えて、時間的な隔たりについても言及されているところが興味深い。ただし、これは2017年時点での研究である。2020(令和2)年度から小学校3年生, 4年生での英語活動が必須となることにより、時間的な隔たりについては手立てを工夫しやすくなる。

ローマ字教育の目的は時代に合わせ少しずつ形を変えてきているが、学習目標には「書き方を確かめながら、身近なものや名前, 地名をローマ字で書く」(新編 新しい国語 年間指導計画作成資料 東京書籍 2019)とある。教室の中で完結する学習ではなく、日常生活と関連性を持たせることによって主体的な学びにつなげる事ができる。そのような見地からも普段目にしたり、使ったりしている人名や、駅の表示などでも使用されている身近な地名を訓令式で学習することに大きな意義は見出せない。

以上の点から、日本語の音韻構造への気づきを促すヘボン式を中心としたローマ字の指導が児童にとって最も負担が少なく、更に英語活動, 英語科の指導へとつながると言える。

6.1.4 一文字一音ではないことへの気づき

ローマ字では日本語の母音に a, i, u, e, o の5文字を当てる。ローマ字指導の経験がある教員4名への聞き取りでは、全員が始めに「“a” は『あ』と読みます。」のような指導でそれぞれの文字と平仮名を結びつけての指導が一般的であるという回答であった。

児童の混乱を防ぐため、指導初期段階では例外を示さず、例外の提示は核となる知識が定着してから行う指導の手法はよく用いられるが、その後の英語学習に与える影響の大きさから考えると、ローマ字の母音指導に関しては必ずしも適切ではない可能性がある。

特に“u”の音については導入の初期段階から、sun, umbrella, unicorn など児童の耳にしたことのありそうな語の例を挙げ、英語ではいくつかの読み方をする事があると提示する事によりその語の英語活動にスムーズにつながると考えられる。アルファベットが一文字一音でないという概念は、一つの漢字に複数の読み方があることを学んでいる小学生にとって、理解が難しいものではないはずである。ただし、ここでは提示に止め、それぞれの音の定着、確認は求めないものとする。

6.1.5 書字

書字を学習する時点で口語として運用に問題のない平仮名であっても、小学校1年生の国語科において丁寧に時間をかけて指導しているところを、馴染みのないアルファベットについて、文字の名前、文字の発音、さらに書字までを数時間で定着させることは難しい。また文字に関しての認識・定着は個人差が非常に大きい。国語科の時間では日本語の音韻体系の気づきと、身近なもののローマ字表記などへの興味を持たせることを第一にし、定着は英語活動、英語語科へ引き継いでゆく方が児童への負担が少ないと考えられる。

6.2 国語科の指導から英語活動への接続

6.2.1 文字指導試案

第1時（3年生1学期3時間中の1時目） 母音5文字とカ行

	指導者の働きかけ	・予想される児童の反応 *指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・oの文字を提示。 ・読み方がわかるか尋ねる。 ・英語らしい発音での英語名前読みと単語の中の英語の音について触れる。 <p>この文字は /ou/ という名前で、単語の中では /a/ /ɔ/ /ʌ/ などの音で発音される事が多いです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アルファベットの名前読みとしてオー、オウと答える ・ローマ字学習であることを予想して「お」と答える。 <p>*文字の音については、漢字に複数の読み方があるのと同様に、英語でも場合によって読み方が変わる事があるということを紹介する。</p> <p>* Let's Try! の単語帳機能などを利用して英語の発音を</p>

	<p>“o”をローマ字では「お」を表す約束にしています。</p>	<p>聞かせてもよいが、ここでは英語には日本語の「お」とは異なるいくつかの種類の音が存在するという気づきを促すことに留める。</p> <p>*外国語活動ですでに児童に馴染みのある単語(octopus, onion など)があれば例としてあげてもよい。</p>
めあての提示	<p>今日はローマ字を学習します。ローマ字はアルファベットの文字を使って日本語を表します。今日のめあては「ローマ字でことばを書いてみよう」です。一緒に言ってみましょう。</p>	<p>・めあてをきき、指導者の指示で全員で一緒にいう。</p>
活動1	<p>・o同様、a, i, e, uについても文字の名前、英語の音の例、ローマ字の音を紹介する。</p> <p>(uの説明の例) uの英語の言葉の中での音はいくつかありますが、/ʌ/のような音で発音される事もよくあります。日本語だと「う」よりも「あ」に近いかもしれませんね。 umbrella, やupの始めの音です。 この文字をローマ字では「う」を表す約束にしています。</p> <p>・o, a, i, e, uの運筆を空中書きで何度か練習した後ワークシートに書く。</p>	<p>・それぞれの文字の名前、英語の言葉の中での音、ローマ字での読み方について聞く。</p>
活動2	<p>(班活動1) a i u e oの5文字を使って、できるだけ多くの言葉を考えましょう。</p> <p>時間を区切って発表させる。</p> <p>出た答えを指導者または児童が板書する。出た言葉をみんなで読む。</p> <p>たくさん言葉が出ましたね。 次は使える文字をもう一つ増やします。kです。文字の名前は/kei/で英語では/k/という音になる事が多いです。cやqという文字も英語で/k/という音を表す事があります。kはローマ字ではこのa, i, u, e, oと組み合わせさせて使われます。 どんな音になるでしょう。 /k/ /a/ …/ka/ か、 ですね。</p> <p>同様に「きくけこ」についても提示する。</p> <p>kはカ行の音を表すときに使います。今度はa, i, u, e, oの他にkも使ってよいです。a, i, u, e, oと比べてみましょう。背が高いですね。アルファベットの小文字には1階建の文字と2階建ての文字と地下室付きの文字があります。kは2階建です。</p> <p>・kを空中書きした後、ワークシートに練習させる。</p>	<p>*班体形に机を移動、思いついた言葉を書くための用紙を各班に配布する。児童は話し合って答えを用紙に書き込む。予想される回答: ao, ai, ue, aoi, ei, ie, など</p> <p>・1回に1語ずつ、班ごとに発表する。</p> <p>・黒板のローマ字で書かれた言葉を一斉読みする。 ・確認した後で、それぞれのワークシートに書き入れる。</p> <p>*児童の状況によりking, keyなどの英単語の例を提示してもよい。</p> <p>・「/k/ /a/ …/ka/ か」を発音する。 *「く」「あ」にならないように/k/を子音のみで発音する。/k/ /a/が/ka/になることについてこの時点では理解できない児童がいても構わない。</p> <p>*kの文字の高さに注目させる。大文字Kと小文字kを比較して形の違いにも着目させたい。</p>

ローマ字指導を援用した小学校英語の文字指導の試案

	<p>(班活動2) kaieuo</p> <p>k, a, i, u, e, oの文字を使い、さっき出た以外でできるだけたくさんの言葉を考えてみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字カードを配布する。各班それぞれの文字3枚ずつを並べ替えながら語を考える。 ・時間を区切って発表させる。 ・児童または指導者が板書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字カードを並べ替えながら話し合って言葉を探す。ワークシートに記入する。予想される語：kai, koe, ika, eki, oka, ke, kakaku, kui, ike, kaku, koko, など ・aieuoの時と同様、班ごとに1語ずつ発表。 ・一通り出たら、板書された語を全員で読み、各自のワークシートに記入する。
まとめ	<p>今日は「ローマ字で言葉を書いてみよう」というめあてでした。ローマ字ではたくさんの文字が使われますが、今日はそのうち6つの文字を学習しました。どんな文字でしたか。そうですね。a, i, u, e, o, kです。これはローマ字ではどのような読み方をしますか。kはaと組み合わせると「か」、iと組み合わせると「き」でしたね。</p> <p>1 アルファベットの文字には名前があります。</p> <p>2 それぞれの文字は英語の言葉の中で組み合わせによっていくつかの発音があります。</p> <p>3 アルファベットの文字を使って日本語を表すのがローマ字です。板書しながら確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・a, i, u, e, o, k (アルファベットの名前読み) ・あ, い, う, え, お <p>板書を見ながら今日学んだことを確認する。 板書をノートに書き写す。</p>
ふりかえり	<p>今日の学習をふりかえって自分の言葉でまとめてみましょう。</p> <p>ふりかえりシートを回収</p>	<p>ふりかえりワークシートに記入する。</p> <p>ふりかえり項目</p> <p>今日は の学習をしました。</p> <p>◎今まで知っていたことは</p> <p>◎新しく覚えたこと、気がついたことは</p> <p>◎面白いと思ったことは</p> <p>◎難しいと思ったことは</p> <p>◎もっと知りたいと思ったことは</p>

6.2.2 小学校3年生1学期3時間での指導の流れ

以上が小学校3年生1学期で配当されている3時間の第1時目の指導略案である。1時目を含め2時目、3時目の目的と学習内容を以下に示す。

限られた時数の中で全ての表記を理解して覚えることを目指して指導するのではなく、1時目のまとめに示しているように、1. アルファベットの文字には名前があること。2. 名前の他に文字の音があること 3. アルファベットの文字を用いて日本語を表すルールを定めたのがローマ字という3点を大前提として児童に浸透させた上で、日本語の音韻形態への気づきを促

す。英語活動で繰り返し名前や固有名詞などに触れる中で次第に日常生活に活用することのできる読み書きが定着することを目指す。

第1時 aiueok 導入。英語の文字の名前，英語の中での音，ローマ字としての音，があることに気づかせる。「か」が /k//a/ から成っていることを紹介する。

第2時 n, m, y, r, w 導入 1時目にkで学んだルールを他の文字にも適用し，日本語の音も音素の組み合わせで成り立っているということに気づかせる。な行，ま行，や行，ら行，わ行の表記について慣れる。ただし，全ての既出文字は暗記されていなくても，ローマ字表などを参考に読んだり書いたりできればよい。

第3時 s, t, hの文字とshi, chi, tsu, fuの表記と発音。 1時目，2時目に学んだことを生かしてsa, si, su, se, soと読んだときの違和感に気づかせ，shの英語の発音から，sha, shu, shoとshiを導入する。同様に，ta, ti, tu, te, toからchの音につなげ，cha, chu, choとchi, tsuを導入する。ha, hi, he, hoと大きな声で発音したときに，喉の奥の方の摩擦により音が出ていることに気づかせ，アルファベットでhuと書いた時とfuと書いた時の英語話者がすると予測される発音を予想してみる。最後に自分の名前を書く。濁音，半濁音，発音については触れていないが，児童の名前に該当者がいる場合，取り上げて書き方を伝える。

示したような指導略案をもって3年生ローマ字導入の段階において国語科で英語の音にまで踏みこんで指導するための前提条件として，児童の中にある程度英語の音意識が育っていることと，指導者が英語の音についてある程度知識を持っていることが必要であると考えられる。そのため，全ての小学校，全ての学級において有用であるとはいえないが，概念を指導し，必要に応じて外国語科で補強していくという捉え方についてはどのような学級でも有効であろう。

6.3 訓令式ローマ字学習を終えた段階において（小学校4年生英語活動の時間中見出し）

前項に示したものは国語科の授業として英語活動につなげる指導である。次に，国語科で従来通り訓令式の指導を既に受けた後の児童に対して行う英語活動・英語科としての働きかけについて考察する。

特別な指導の手立てをとらない小学校4年生の4月の時点で訓令式またはヘボン式ローマ字でほぼ正しく自分の名前がかける児童は2019年度に筆者の指導している3校においては半数以下で，その多くが学校外で英語を学習する機会のある児童であった。

以下に国語科で既にローマ字の導入を終えている4年生の児童に，その知識を生かし，スムーズなヘボン式への移行と日本語，英語の音のより深い理解へとつなげるための試案を示す。

Let's Try! 1, 2それぞれには文字の学習のユニットが1つずつある。文字指導を該当のユニットに限ることなく、年間を通して繰り返し毎時少しずつ文字の名前、字形の認識につながる活動を取り入れることにより、小学校5,6年の英語科へ抵抗なく進んでゆける。毎回の授業の中で小さなステップを設定しながら更にスパイラルに取り扱う活動を提案する。

6.3.1 ステップ1 訓令式・ヘボン式の発音の違いへの気づき 一名前の表記から

6.3.1.1 名前書き

児童にとって最も身近な自分の名前を書けるということは自信につながる。既に訓令式で学んだ児童はsi, ti, tu, ziなどの綴りで練習してきているが、国語の学習を否定することなく、「英語の時間の書き方」として自分の名前の書き方を学習する。

児童には、平仮名や漢字を読めない人に固有名詞などの情報を伝えるための表記という観点から日本語の発音により近くなるとされるヘボン式を用いるということを伝える。外国にルーツのある名前などで固有の綴りがある場合はその綴りで書く。同じ名前であっても複数の綴りが存在するものもあるため、該当すると思われる児童の保護者には予め確認しておくとうい。

6.3.1.2 ワークシートに名前を書かせる

ワークシート、ふりかえりシートなど児童に名前を書かせる際には名前をローマ字で書くよう指導する。書いたものは綴りや文字のバランス、高さなどチェックする。

6.3.1.3 その日の日直の名前をクラスに尋ねる。

Who are today's leaders? Kenji and Mari. How do you spell "Kenji"?などと児童とやりとりをしながら「け」は“k-e”であることを音素単位で発音するなどしながら名前を板書する。また、児童はk-eと答えるべきところをk-iと言ったりするかもしれない。誤りから正しいローマ字の綴りへと導き、次第に児童の中に定着させることを目指す。

6.3.2 ステップ2 音の違いへの気づき—ライムを通してライムワードや既知の語を通して英語の音とローマ字の音の違いを知る

cat, mat, hat, batなど児童に馴染みのある言葉のワードサーチを通して音への気づきを促す。

cut, hut, nutのuは日本語の「う」とは異なる音であることを示す。

up, umbrellaなどの語頭の文字もuであることを提示する。

6.3.3 ステップ3 識字の定着

ワークシートや日直の名前などでヘボン式のローマ字に親しむ中で次第にbとd, pとq等の字形が似ている文字の識別力をつけ、少しずつ四線の正しい位置に書くことができるように促

す。しかし書字の認識については個人差が大きいので、現時点で完全に理解できていなくても大丈夫であるということを見事に繰り返して伝えたい。

これらのステップをスパイラルに繰り返し活動として行うことで、少しずつ文字になじむことを目指す。特に、ライムワードを丁寧に扱うことが、ローマ字の知識を生かしながら、英語の音と文字の関係の気づきにつながると考えられる。5年生、6年生で教科としての英語学習の前に、英語の音と文字に対しての素地をしっかりと作り上げたい。

7. まとめと今後の展望

ここまで小学校3年生・4年生のそれぞれの段階で英語活動に援用するための試案を示してきた。試案作成の元となった根拠を以下にまとめる。

訓令式・ヘボン式の往還：国語科としての指導が訓令式先行であったとしても、可能であれば同時にヘボン式についても触れることが、その後の英語活動・英語科での学習へ児童の負担なく繋がっていくと考えられる。

文字の名前：アルファベットの文字の名前をエー、シーのように日本語式に発音して国語科で指導すると、英語活動で同じ文字について/ei/, /si:/という別の発音を教え直す必要はない。これは指導者にとっても負担であると考えられるが、学習者にとっても負担が大きいと想定される。導入の当初から英語の発音で指導することによって児童の負担も軽減する。

文字の音：「アルファベットの文字の音には漢字のように一つの文字に何通りかある」という概念を指導することがその後の児童の学びに有効に働くという仮定に基づき試案を作成した。ただし、その指導はそれぞれの音について詳細を理解するためではなく、ローマ字から英語活動にスムーズにつなげるための紹介に留める。現時点でこれが有効か否かについてのデータが存在していないため、今後の実践の中で検証してゆきたい。

書字：文科省作成教材“Let's Try! 1, 2”では、小学校3年生で大文字、4年生で小文字の学習するように指導計画が立てられている。しかし3年生の国語科でローマ字学習を引き継ぎ、連携して英語活動につなげてゆくことが書字指導の観点からも児童への負担が少なく効果が大きいのではないかと考えられる。従来筆者の指導する3年生の英語活動において積極的な書字の指導は行ってこなかった。前述の想定のもとに2019年度試験的に名前のローマ字ヘボン式書きを導入してみたところ、4年時に小文字の学習を取り扱った時よりも短時間の指導で自分の名前をより正確な字形、綴りで書くことのできる児童が増えた。

今回作成した試案を元に、ローマ字学習と時期や内容を連動させた文字に指導を小学校3年生、4年生に実際に行うとどのような効果があるのかを検証したい。更に指導したそれぞれの時点での児童の理解度と学習意欲、また文字に対する理解度が上がったことによる英語活動、英語科へ取り組む態度の変化も測定する必要がある。松浦（2005）は入門期においてローマ字

の知識は英語学力と相関関係があるとしている。これは中学生を対象にした調査であり、英語科が必修となっている現在、また発達段階も全く異なる現在の小学生にそのまま当てはまるものではないが、何らかの関連性は見られるのではないかとすることは予測される。それらをふまえ、高学年、中学校の英語学習へスムーズにつなぐためローマ字学習を生かした効果的な指導法・教材の研究をしてゆきたい。

引用文献・引用インターネット資料

- 川上典子（2014）「英語教育における小中連携・文字指導のあり方」『国際人間学部紀要』20号 鹿兒島純心国際人間大学
- 本田勝久・小川一美・前田智美（2007）「ローマ字指導と小学校英語活動における有機的な連携」『大阪教育大学紀要 第5部門 教科教育』56号 大阪教育大学
- 松本由美・大友美奈（2018）「小学校英語における英語を書くことの指導についての考察」『論叢』18号 玉川大学教育学部
- 松浦伸和（2005）「入門期におけるローマ字学力と英語学力の関係」『日本教科教育学会誌』28号 日本教科教育学会
- 文部科学省（2016）「教育課程部会外国語ワーキンググループによる審議の取りまとめについて」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377057_1_1.pdf（最終閲覧日2020年1月1日）
- 文部省（1950）「改訂 ローマ字教育の指針」https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/series/23/23.html（最終閲覧日2020年1月1日）
- 文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂出版
- 文部科学省（2016）「小学校の新たな外国語教育における補助教材（Hi, friends! Plus）の作成について（第5・6学年用）」http://mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm（最終閲覧日2020年1月1日）
- 長澤直子（2012）「ローマ字教育とローマ字入力について考える ― 二者の間の接点に注目して」『情報化社会・メディア研究8』放送大学
- 東京書籍（2019）「令和2年度年間指導計画作成資料」<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/list/keikaku.html>（最終閲覧日2020年1月1日）
- 山本玲子・池本淳子（2017）「英語学習につながるヘボン式ローマ字のための教材開発」『JES journal』17号 小学校英語教育学会

参考文献

- 小松昭範（2016）「小学校英語教育における文字の導入に焦点をあてた指導に関する研究：フォニックス指導を効果的に活用した指導の在り方について」『鳴門教育大学学術研究コレクション』2016学位論文
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省（2009）『英語ノート1』教育出版
- 文部科学省（2009）『英語ノート2』教育出版
- 文部科学省（2012）『Hi, friends 1』東京書籍

文部科学省（2012）『Hi, friends 2』 東京書籍

文部科学省（2017）『Let's Try! 1』 東京書籍

文部科学省（2017）『Let's Try! 2』 東京書籍

文部科学省（2017）『We Can! 1』 東京書籍

文部科学省（2017）『We Can! 2』 東京書籍

中村典生（2016）「小学校英語における文字導入の問題点」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 第55
輯 岐阜市立女子短期大学

土屋佳雅里（2019）「小学校外国語（英語）教育とローマ字教育の考察—外国語活動と国語科ローマ
字学習の連携を考える」『Sophia University Junior College Division Faculty Journal』 第40号

To Teach Writing English at Elementary Schools in Japan: With the Application of ‘Romaji’ System

Yumi MATSUMOTO, Mina OTOMO

Abstract

Compulsory English education in Japanese elementary schools would be commenced in April 2020, when English writing for elementary school students is introduced. In this paper, teaching writing English with the application of ‘Romaji’ system would be discussed to reduce the burden of writing English letter for children, and to increase the effectiveness of teaching English at elementary schools.

Keywords: English teaching at Japanese elementary schools, ‘Romaji’ system